

新しい障害者像をつくる パラアスリート ~心のバリアフリー実現へ~



22歳で視覚障害者になってからパラリンピックに4回出場し、走り高跳び、自転車の2種目で金・銀・銅メダルを獲得した葭原さん。今もブラインドサッカーやサーフィンの国際大会に出場するなどパラアスリートとして活躍するほか、東京2020パラリンピック応援大使の活動を通じて、バリアフリーな社会の実現に尽力されています。健常者、障害者両方の視線を知る葭原さんに、これまでのアスリート人生や、挑戦し続けるエネルギーの原動力、考え方などを伺いました。

葭原さんは学生時代まで鶴ヶ島市に住んでいらつしやいましたが、どんな少年時代を過ごされましたか。

小さいときはザリガニ釣りをしたり入間川で泳いだり、埼玉の豊かな自然の中でいろいろな体験をしました。スポーツが得意で、小学生のときは地域の連合運動会などで学校代表に選ばれて走っていて、将来はオリンピック選手などと言われていました。しかし、まさか自分がパラリンピックで金メダルを取ることになるとは思ってもいませんでした。私が小さいときは「スポーツといえば野球」であり、地元野球チームに入っていました。が、野球のボールが見えづらくなってきたので、中学生からサッカーを始めました。

サッカーの王様と言われたペレがブラジルから来日したとき、国立競技場へ見に行き、衝撃を受けました。ペレのプレーはもちろん素晴らしいのですが、私はそれより満員のスタンドの盛り上がり魅了されました。「応援席ではなく、いつかあのピッチに立って歓声を受けたい」と子ども心に思いました。

葭原さんは「網膜色素変性症」により徐々に視力が落ち、22歳のときに障害の認定を受けることになったそうですが、どのように気持ちを切り替えられたのですか。

障害者認定を受けた後、所沢市の国立障害者リハビリテーションセンターに通いましたが、そこでの出会いが自分の意識を変えたと思います。私は自分が障害者になったとき「かわいそうな人」にはなりたくないと思っていました。そこには同じような意識を持った仲間がいて、10人くらいで一緒にスキーやキャンプに行ったり酒を飲んだりしました。明るく活動的な仲間と過ごすうちに「新しい障害者像をつくってやろう」という気持ちになりました。

ら、失敗を怖いと思うことはありません。スポーツでは失敗することは当たり前ですし、そのときになぜ失敗したのか、次はどうやったら成功するのかをいろいろ考え、工夫し、チャレンジします。スポーツを通じてチャレンジ精神が身につく、それが日常生活にも生きているのかなと思います。

パラリンピックでは「優勝する」という目標を立て、達成のための課題をリストアップしました。そして、その課題をクリアするには何をしたらいいか綿密に計画を立て、日々練習に励みました。

学生のときに楽しんでいたサッカーを、ブラインドサッカーで再開されましたが、そのときはどう感じましたか。

初めてブラインドサッカーを体験したとき、見えないうちでボールを蹴る難しさより、またサッカーができる喜びのほうがずっと大きかったです。スピード感も迫力もあり、その面白さにはまり、日本代表にもなることができました。今は日本代表は引退しブラインドサッカーチームの選手兼監督をしています。

また、私が勤務する参天製薬は日本ブラインドサッカー協会のパートナー企業であり、私のパラアスリートとしての活動を全面的にバックアップしてもらっています。参天製薬は、目が見えない立場の患者も意識して事業展開をすすめており、私は当事者の立場から製品作りなどについてアドバイスをしています。

東京2020パラリンピックに向けて施設などはかなり整備されてきました。一方、障害者に手助けをしてあげたいがどう接していいかわからないという人もいます。



Profile

東京2020パラリンピック応援大使
参天製薬株式会社・企画本部CSR室

よしはら しげお
葭原 滋男さん

1962年東京都生まれ。学生時代まで埼玉県鶴ヶ島市で過ごす。網膜色素変性症により22歳のとき障害者認定を受ける。パラリンピックには4回出場、1996年アトランタでは銅メダル(走り高跳び)、2000年シドニーで金銀2つのメダル(自転車)、2004年アテネで銀メダル(自転車)を獲得した。その後、ブラインドサッカーに転向し、日本代表としてアジア選手権などに出場したほか、障害者サーフィンで日本代表に選ばれる。東京都庁勤務を経て、現在はパラリンピック応援大使として東京2020パラリンピックを盛り上げる活動のほか、参天製薬社員として視覚障害者の立場から製品開発のアドバイスなどを行う。

障害者スポーツと出会ったのも、その体育の先生のお陰です。全国身体障害者スポーツ大会が沖縄で開かれると聞き、沖縄に行きたい一心で選手に立候補しました。先生がいろいろな種目を見てくれた中で、走り高跳びの素質を見抜いてくれました。これならパラリンピックも狙えるかもしれないということになり、本格的なトレーニングが始まりました。

スポーツとの出会い、パラリンピックへの出場は自身にどのような影響を与えていますか。

スポーツは、自分の人生になくはならないものひとつです。私は失敗や障害を自分に与えられたクイズだと思っています。そのクイズをどのように解いていくか、楽しみながら日常生活を送っています。だからまだ足りないところが多いと思っています。

心のバリアを取り払うために大切なことは、障害者と健常者は違うという意識ではなく、同じ仲間だということに接することだと思います。その意識を持ってもらうためには小さいときから障害者と普通に触れ合うのが一番だと思っています。そのために、今、ブラインドサッカーの体験教室で小学校を回っています。最初は「視覚障害者が来たぞ」と構えて見ていた子どもたちが、「一緒に体験することで心のバリアが取り払われ、「ブラインドサッカーって面白い」「パラアスリートってカッコいい」と言ってくれます。この体験を通して子ども達が視覚障害者にどのように声を掛けようかと考えることが、困っている友達にどのように声を掛けようかと考えることと同じだと思っていますね。

最後に、葭原さんの今後取り組んでいきたいこと、目標を教えてください。

障害者の中には、家から出ることができずにひきこもっている人もいます。障害者ももっと外に出て楽しんでもらいたい。そういう社会をつくっていくのが私の今後の目標であり、スポーツはそのきっかけづくりに大いに役立つのではないのでしょうか。

また、私は参天製薬では社内研修の講師としても活動しています。研修では、私の体験や経歴を話し、見えないうちの立場を実際に体験してもらいます。これらの活動を通じて、障害がある人にはどう接すればいいか、また障害がある人もどんな社会に出て行けるよう、日本さらには世界へ発信し、誰もが住みやすい社会に変えていきたいと考えています。